

嵐の前の静けさ

六月二十八日

●大海人皇子は、桑名から野上に到着した

翌日、つまり、六月二十八

日に、和勢へ往て、高市皇子の軍の

様子を検閲され、野上の行宮へとお還りに

なつた。(記)

●前なるほど、大海人皇子と、胸形君徳善の女

尼子娘との間の子として、高市皇子は生まれた

という。(天武紀二年二月条参照)

●とはいえ、すでに述べたように、壬申乱

(六七二)當時には未だ、

△胸形氏は、宗像神社の三女神に、お仕え

しては、いなかっただであらう

と推察される。(第四十三章へ宗像神社)の

項において既述)

●いま、追手(正面)の軍の総帥として高市

皇子がなすべきは、眼前に立ちはだかる水沼

君(現在の宗像あたりの豪族)の軍を撃破す

る(二)であつたらうか。

平元(生) 柳(陣) 小林 507P
→ 紀下394P

4,881P

3362-3/4, 2574, 2575, 4979P, 4981P, 紀下465P, 4980P

●そーてこの後、高市皇子の軍、察するところ 胸 形
君の軍は、水沼君の軍を打ち破ったように
思われる。
●そこで、
壬申乱後、水沼君に代わって、胸 形
君が三女神を祭祀することになるのであろう
と推測される。(第四十三章へ三女神、宇佐
島から宗像へ)。第六十五章へ天照大神、三
女神・八幡神の概略の推移の項において既
述。第十六章へ宇佐島の三女神、宗像の地
へ降臨の項において詳述したい)
●なお天武紀十三年十一月一日条に、胸
方君ら五十二氏に姓を賜わり、朝臣とい
つた、とある。
米
六月二十九日 (己丑)
翌日の六月二十九日にも、大海人皇子は和
断へおでましになり、高市皇子に命じて兵士
たちに号令させ、亦、野上の柳營へお
還りになった。
●それにしても、大海人皇子は、何故

近江（大宰府）により近い口和斬足ら、もうく
はそれ以西の地に本陣を移し、近江（大宰
府）方に圧力を加えようとされなかつたので
あろうか。

先に述べたように、恐らく、
天智上皇の軍が西進してきた時、日野上
の行宮にへ不破宮へあたりで、大海人皇子自
らかさえぎり止め、つもりでおられたのであ
ろう。✓
と推察される。

天智上皇に正面きって立ち向かえるのは、大
海人皇子以外に、誰もいないのである。他の
者など、天智上皇に睨まれただけで、怯え、
ていまいに違いない。

もつとも、倭国（近畿）から、近江（大宰
府）救援の爲、真先に駆けつけて来るのは、
騎馬兵隊であらうか。

先鋒隊がやってきたならば、まさに、
へ飛んで火に入る夏の虫✓

ふくろねすみ
鼠の袋 1932
4822 4871

馬世 1189
4883

所用 1126

志は大島人
馬区 393
6月夏

である。
大海人皇子は、関門海峡（長豊海峡）あたりの船をことごとく、九州側に結集させておられたことであらう。

所用があつて対岸（彦島や下関）へ向かった船も、用が済むやいなや慌だしくもなだちに南岸へ戻つてきたに相違ない。北岸は、不

必要に長時間停泊することは許されないことであつた。

関門海峡（長豊海峡）を臨む地へ馳せてきた天智上皇の軍兵隊は、渡海の術もなく、へまつた、計られたぞと悟つて歯ざりし、右往左往するだらう。

周防国の軍に、退路を断たせればよい。敵の兵等は、いねば袋小路の中にいるよう

なもので、鼠猫を噛むのとえ通り、なんとかし

H29(2017)7.5~7.11
H30(2018)11.15(木)~11.16(4回)

4.884P

ミコウ 虎口 560
ミコウ 虎口 560
ミコウ 虎口 560
ミコウ 虎口 560

下
略

て窮地を脱し、活路を見出した者達は、命
からから先を争って自軍へ駆け向かうで
あろう。
このようにして、天智上皇の軍を動揺させ
ようとする目論まわっていた。
しかし、それは結果であって、――いま
はまだ先のことなど予測すらつかない布陣の
時であった。
大友皇子の野上の行宮に（不破宮）へ
および大友天皇の近江宮に（大宰府）の両
陣営は緊迫した嵐の前の静けさの只中に
あった。

米

H5.11.1 (A) $\oplus$
 $\rightarrow$

④ 4864^P
⑤ 4859⁰

たけち みこう
番茶の御行

あちかみ 43^p
紀下395^p 注144.885^p

QF392

紀下394^P

かきよえ 348P
快挙 胸のすくような -
④4881P 6A29日

大倭国（肥後国）での戦い

この日（六月二十九日）

慌たしくな
後にくま
きた
大倭国
(肥後国)

この日（六月二十九日）、
大海人

皇子軍にとり下
口快拳凸と川うべき一つのこと

件
加
起
三
大
。

おとものむかしに
大伴連吹負おふひ
(男吹負おふひ)は、
ひそかに、
留守とまりまふ

司の一人坂上直能毛(高坂王の配下か)と

である

は
か
7
た
- 70

な
あ、
心
神
朝
に
歸
化
し
た
阿
知
使
主
を
祖
と
す

る倭漢氏は、坂上氏をはいめ多くの枝氏にわ

かれ、
その
すべ
てが
口直
姓
で
あ
っ
た

男改負は、一、二の漢直（帰化人）

う
に
こ
う
言
っ
た
。

お水は詐って、夕々ノミコウ

市の御行)となることにする

そ
ー
て
さ
ら
に
、

おれが数十騎を率いて、飛鳥寺（法興寺）

FS. 11. 2 ⑤ 名を騙る 宇谷下236

何と 4.886 P

小林 1034 雄

北下62 住8

北下395 ④ 4840

百市字4258

の北の道から出て、軍營に現わいたら、あま
えたちは寝返るのだぞ」と言った。
■ やかて男吹負は、百濟（人名か地名か不明）
の家で武器を整え、南の門から出発した。
■ ここにおいて先ず秦造熊（秦氏は心神朝
に南朝鮮から渡来した弓月君の子孫と伝える）
化人の雄族（中国系と称した）に、犢鼻
（ふんどし）をさせ、馬を馳せさせ、寺（法
興寺）の西の軍營にかけこませて、こう叫ばせ
た。
「タケノミコウが、不破の方からやって
きた。たくさん兵達が従っているぞ」
■ 秦造熊は、言われた以上によくやった。
「タケノミコウが、不破からやってきた。軍勢
がいっぱい従っているぞ」
■ 外国人特有の口調で、秦造熊は馬上から
大声で叫んだのだった。
■ このように、大伴連吹負（男吹負）が、
公然と、高市大卿（御行）の名を騙り、
「おれは、タケノミコウだ」

紀下395³⁹

④ 4811¹⁸ 2013年6月29日

4887^P

④ 4859¹¹

④ 485^{...}

④ 4866^P

こと

こと

草ではない!

と言明した為、おかしいことに、
へ高市大卿(御行)は、大伴連吹負である。
と、いうことになり、壬申乱後、人々の
語り種となったことであろう。
・「まり」日本書紀の編者が、高市大卿
(御行)のことを吹負と書いても、あな
かち、間違ひとは云えまい。うに想到される。
「タケチノミコの大軍がやつてきたぞ」
と、叫ぶ秦造熊の叫び声は、敵の軍を驚かせた
禪姿の熊が叫ぶと、絶叫すると、
へ高市の御行が来た。
とは聞えず、疑いようもなく、六月の暑
いさなか、日本人が禪をいめて、
高市皇子が来たぞ。
と叫んでいゝように思えた。とであらう。
五日前の六月二十四日に、
を拒んだ留守司の高坂王が、
時、飛鳥寺(法興寺)の西の槻の木の下に軍
営をかまえていた。
その軍営のなかの兵士たちは、熊が叫ぶ声

紀下396
187

おひ
4885P
318P

4888P

北の路 紀下394P
不変にとある

我先にて

先を争ひ

どう87
動揺 1581
色めく 160'

に動揺し、色めき立った。
へ高市皇子の大軍がやって来た。
と思ひ込んだ兵達は皆、どうしてよいのか分
らず、恐れをなして、悉く逃げ散ってしまっ
た。
●秦造熊の演技は、よほど真に迫ったものだ。
ったのであろう。
●当然、高市皇子の大軍が押寄せて来るも
のとはかり思っている所へ、
吹員（男吹員）が、数十騎を率いて、飛鳥寺
（法興寺）の北の路からひよいと現われた。
●秦造熊の叫び声を聞いて、怯えおののき、
我先に逃げ去った筈の留守司坂上直熊も
および諸の直等（帰化人等）が、どこからと
もなく飛び出てきて、
「計略通り、うまくいきましした」
「見事な大成功です」
と口々に言いあい、高市の御行々
や、大伴連吹員（男吹員）に従った。
●その他の兵士達もまた服従した。

井上下297末

井上下297

4,889P

紀下398 3行

井上下297

紀下396 3行

4852

紀下390 2行

井上下297 4行

占拠 1261

4900 同

こうして男吹負は、飛鳥寺（法興寺）の西の櫓の下に敵の軍營を占拠した。

次いで男吹負は、夕ヶ崎ノミコ（今）の命令

だと称し、近江の大宰府（大友天皇

の指示により、武器や兵等の調達のため大

倭国（肥後国）へ来ていた穂積臣百足を、夕

クマガ原の小墾田の武器庫から呼び寄せた。

百足は、馬に乗ってゆっくりやって来た。

飛鳥寺（法興寺）の西の櫓の木の下まで来た

とき、誰かが「馬からおりろ」と言った。

百足がぐずぐずして馬からおりないでいる

と、馬に乗った男がいきなり百足の襟をつか

んで引きずり落とし、弓で一矢射た。ついで刀

を抜き斬り殺した。

穂積臣五百枝・物部首日向（いさよ）も近江

からの徴兵の使者も捕えたが、しばらくし

て罪を許し、軍中においた。

また、高坂王と稚狭王とを召し、軍に従わ

せしめ、高坂王と稚狭王とを召し、軍に従わ

由489749 右年の歩解 同4940 4946 「とこて」 2518 6下401 25 396 4864 4912 4890 4900 4898 1たい 元977 次第 紀下396 4900 同

せた。
 大倭国(肥後国)は、こうしてとりあえず

大海人皇子軍に有利な展開を見せた。

男吹負は、大伴連安麻呂(大伴連御行の弟)

旅人の父(坂上直老・佐味君宿那麻呂ら)

不破宮(野上の行宮)に遣わした。

事の次第を大海人皇子に報告する為である

なおこの報に、大海人皇子は大いに喜ん

て、男吹負を将軍に任命される。

つまり、大倭国(肥後国)地域の将

軍に任命さる。

と解いた。(後述)

ところで、唐突ながら、

①ここに記されてゐる、己丑(六月二十九日)

条の、佐味君宿那麻呂と下

②翌日、壬申の記述中に二度ある庚寅条

のうち、二度目の庚寅(七月一日)条の、佐

味君少麻呂

木追って述べるように、七月一日、大和

国の大坂(奈良県北葛城郡香芝町逢坂。二上

山の北を河内へ抜ける穴虫越えにあたる)に

駐屯したという日佐味君少麻呂

と推察される。

のたろう 64

の二者は別人なのであろう、と考えてみた。
・何故かといえ、ただ一人の人物が、

(1) 六月二十九日(己丑)に起こった飛鳥寺での

出来事を報告する為、その事件の後

に早々に出発し、直線距離で一五〇キロも

離れた不破宮へ向かい、

(2) 不破宮の大海人皇子に報告した後、トンボ

かえりにとつて返して大和国へ帰り、

(3) 翌日の七月一日(庚寅)大坂(北葛城郡

香芝町逢坂)に駐屯した、

とは考えにくいからである。

・全く不可能とはいえないにしても、

大坂に駐屯するだけの為、そんなにも慌し

く帰って来る必要などあるまい。

(4) 恐らく、翌日の七月一日の時点を見ると

・大倭国(肥後国)を出発した日佐味君宿那

麻呂は、不破宮(野上の行宮)へ向かってい

る途中であり、

・一方、別人の日佐味君少麻呂は、大和国

の大坂に駐屯したのであろう、

4,892^P

25/8¹

9/16 17/13
6/14

米

もたつとも二人は父と子であつたのかも知
れない。
すなわち、父の死後、子が父の名を受け継
いだ為、^{ちち}父の死後、^こ子が父の名を受け継
紀の壬申乱の^{じんしんのらん}記事中に、^{きじ}同名が記さ
ようにも^の想像さ^{ようぞう}す。の
＊なお、^{すくな}佐味君^{さのみ}宿那麻呂^{すくなまろ}は、^{すくな}佐味君^{さのみ}少麻呂^{すくなまろ}
の^{すくな}宿那^{すくな}麻呂^{まろ}の項において述べた。
へ天徳日命^{あまのひのひのみこと}の

蜂起 2012^P

紀下384^P

4,893^P

紀下380^P 12
4868^P 1245
扶桑略記62

倭国（大和国）でも蜂起

天智上皇は何処に居られたのであらうか。

天武紀元年五月是の月条には
時に朝廷美濃・尾張・西國司に宣し
て曰はく山陵造らむが爲に豫め人夫を
差し定めよとのたまふ則ち人別に兵を執

らむ臣以爲はく山陵を爲すには非い
必す事有らむと云々

北方に位置する山城国宇治郡山科郷にもし
くは京都市東山区山科に於て山陵を築

延喜諸陵式は山科陵近江大津宮御宇

天智天皇。在山城国宇治郡北城東西十四町
南北十四町。陵戸六烟と述べる陵墓要

人煙、けむり

挽歌 1832

扶桑略記 62P
天智略 513P

あるに
云 259
御幸 244
駕 小林 1080
太いコ 4.894

御幸 244
駕 小林 1080
太いコ 4.894

覽は所在地を「京都市東山区山科御陵上御廟
野町」とする。卷二十一 四七と一五五に挽

歌等がある。(「日本書紀」(F) 日本古典文学大

系、岩波書店、三八〇頁注一二参照)

また、扶桑略記「天智天皇条の末尾には、

こう記されている。

天智十年十二月三日。天皇崩。同

十二月五日、大友皇太子、即為帝位。生年廿

五。一云、天皇駕馬、幸山階郷。更無還御

永交山林。不知崩所。只以履沓落處為其山陵

以往諸皇不知因果。恒事敦害。山陵山城國宇

治郡山科郷北山。高二丈。方十四町。致

この文は、あるいは、

天智十年十二月五日に、大友皇太子が帝

位に即かた後、天智上皇は(大和国

へお還りになり)馬に駕つて山階郷へ御幸

されたが、(壬申乱において捕えられ

更に還御されることは無かった。永く山林中

(大和国の吉野の山中のことであらう)に留め

置かれ、崩所は分からない。山陵は、山城国宇

置かれ、崩所は分からない。山陵は、山城国宇

小林 334
ハウ

H11.11.28 (甲)
H9.5.3
H5.11.4 (甲) (乙)
→

ニと

4.895[↑]

④ 4868[↑]

大11.7.4

治郡山科郷北山である
と聞いた意味であろうか。

■うこでこの物語では、仮りに

へ天智上皇は、奈良盆地^{なうら}の北方^{ほつぽう}の山階郷^{やましな}

（宇治郡山科郷、もしくは京都市東山区山科^{やましな}）

へ行幸しておられた

と解して、話をすすめてゆきとしたい。

*

■尚、壬申乱^{みんしんらん}の記事を見ると、奈良盆地内

に、天智上皇の精鋭部隊が居なかったように

見受けられる。

■というところからあえて言えば、

へ天智上皇は、朝臣や兵達のほとんど全て

の者達を引き連れ、奈良盆地の北方へ例え

ば大宰府の宇治に相当する所、山城国宇治郡

へ居所を遷し、山陵を築きつつ政治を行なってお

られた

ように思われる。

*

312

こと

4,896^P

天智上皇および臣下の者達は、西国での変
事のいなどつち知らず、山積する仕事に追
われる毎日を送っていた。
なにより、九州の大宰府と、倭国（近畿）
との間に位置する不破（長豊海峡）の一带が
臨時突然、大和皇子の勢力下に入ってしま
った為、近江宮（大宰府）からは、連
絡のしようもなかったのだった。
人や馬や船が通行出来ないのは勿論、火
烽火も中継されず、東国へは一切、何の情報
も伝わらなかった。
玄海灘の沖を東行する船さえも、拿捕され
たことではなかったろうか。
に、何やら、不穏な動きがあった。
それは、西の大倭国（肥後国）で男吹負が
敵の軍営を奪い、大きな戦果をあげたのと
同時に、

こと

万-89P
懐仁帝68 4,897P

同文 4890P 20行
4938P 二上山の北を抜ける 紀下401注34
4938P 大坂 紀下396注14 紀下396 404注4 9行

日 六月二十九日（己丑）のことであった。

三輪君高市麻呂（後に著陵付近で近江軍を撃破）・鴨君蝦夷（後に河内の近江軍に備えて石手道を守備）ら、武力にたけた多くの者達

吹負（高市の御行）の旗の下に集まった。

ここに、吹負（高市の御行）らは、

近江（近江上皇、つまり天智上皇の陣営を襲う）襲撃しよう

と、はかり、軍の中のすぐれた者を選んで

副将軍及び軍監といた。

なお、万巻二一四八の注記に、近江天皇とあり、懐風藻に淡海帝とあって、共に、天智天皇のことを示している。

近江を襲うとは、近江上皇（天智上皇）の陣営を襲うという意味であろう。

この物語ではこれまで、大宰府の大友天皇の軍のことを近江と呼んできたが、この水以後、奈良盆地北方の天智上皇の軍のことを近江と呼ぶことにしたい。

*

こと

こと

端を向く 1290P
呼応 765P

4898P

蜂起 2012P

4890P

4938P
下 396P
400P 実行

七月一日 (庚寅)

翌日の七月一日(庚寅)に、吹負(高市の

御行)の軍は、まず北を目指し、奈良へと向かった。

吹負(高市の御行)を倭国(大和国)方面の

將軍とされ、

来る七月一日に、必らず蜂起せよ

と命じておられたのであろうかと思われる。

もつとも、遠く離れた九州で、果して本當

に、大海人皇子が挙兵されたのかどうか、

さらに又大海人皇子軍に有利な状況となつて

いるものかどうか、東国、倭国(大和国)

の吹負(高市の御行)の知り得るところでは

なかった。

とはいえ、將軍吹負(高市の御行)は、大

海人皇子が戦闘開始されたことを全面的に

信じて、それと呼応する為、倭国(近

畿)での戦端を開いた。

こうして、倭国(近畿)方面でも果敢な戦

い加繰りひろげられてゆく

*

ーかし、^{あひみのみや}近江宮^ハ（大宰府）^ハ・^{やまとのくに}大倭国^ハ
 （肥後国）^ハ・^{やまとのくに}倭国^ハ（近畿地方）の三ヶ所
 もの戦^{たたか}いを、いわばませにせにただただ時の経^け
 過^かり^{どお}述^のべてゆく^ハことは煩雜であり、記^き
 述^いに^いく^いので、――日本書紀の編纂者達^{たち}
 は、^{やまとのくに}倭国^ハ（近畿地方）での戦^{たたか}いに関^{かん}しての
 み^ミ（後半部^{ミタマ}）にとりまとめて述^のべることにしたの
 であらう、と想到される。（第八十五章八倭^{やまとのくに}
 国^ハ（大和国）^ハ方面での戦^{たたか}い以降^{以降}の頃^{ころ}におい
 て詳^{しょう}述^{じゆつ}した）

大倭国(肥後国)へ急行

七月一日

占ぬしたことなど水つりて下大海人皇子に報
 告する為、大伴連宅麻呂、坂上直老・佐味君
 宿那麻呂らき不破宮（野上の行宮）へ遣わし
 大倭国（肥後国）の

なお、七月二日条から推察すると、恐ら

に、シー・シー 大海人皇子は、大倭国（肥後国）での
をふけひ

大倭国 (肥後国) の小墾田の兵庫を手中にし

たとは、まことに朗報であつた。

大倭人皇子は、大倭国（肥後国）での予期

△男吹負を、大倭国（肥後国）~~方面~~の將軍

[illegible]

と任命された。
（紀）
既述）

か、ここ一つ、
縣念けんねんされ
る、
とが
あつた。

紀下396^P

紀下388^{本3行}
三輪君⁴⁸²⁷ 4901⁴⁸³⁰

多臣品治^{4806^P}

紀下386^{3行} 宇佐伎^{133^P}
特^{390^P} 4923^P

紀下397^{注26}

東道將軍紀下399^{3行}

と

大倭国（肥後国）の武器を奪われたことは
近江（大宰府）軍にとつて、大きな打撃で
ある。きつと奪回の為、多くの近江の兵達
が南下してくるであらう。
・その時、男吹負のわぶかな軍兵達が防戦（
得るかどうか、心もとな）
う、こでこの日、七月二日、大海皇子は、
東道將軍紀臣阿閉麻呂・彌奴国の湯
沐令である將軍多臣品治・置始連菟（宇佐伎
にも作る）に、こう命じられた。
「三輪君子首（六月二十五日以後、阿蘇外輪山の
関を守っていたと思われ）と共に、数万の兵を
率い、伊邪国（豊前国）・大山（外輪山）よ
り、山を越えて、（大）倭国（肥後国）へ
急行せよ」
天武紀元年七月二日条には、次のように記
されてゐる。
天皇、紀臣阿閉麻呂・多臣品治・三輪君
子首・置始連菟を遣して、数万の衆を率て

紀下399³行
注31

4830¹²行
4923¹

4.902^{P-1/2} 紀下397¹

た5の
た5の
た5の
紀下396^P末2行 紀下398^P末2行

伊勢・大山より、越えて倭に向はしむ

「自伊勢・大山、越え向倭」

柳あたり

察するところ

紀臣阿閑麻呂・多臣足治・置始連菟は

（伊勢国北端部に地理的に相当する所）豊

前国北端部より、三輪君子首は大山（外輪山）

より、えを越えて大倭国（肥後国）方面へ向か

わせになった

といった意味なのであろう。と思われ。

また、紀臣阿閑麻呂を東道將軍（七月九日

条）と記すのは、本来、九州の東岸域を守備

する軍の將軍だったからであらうか。

4,902^P-³/₂

4830

合歴④ 4917°
系下396°末

たらのに冠屯 紀下396°末
たらの屯 4822°
4900°中央
たらのに冠屯 紀下398°末
たらの屯 4822°
4900°中央
見いさす 325°

せることうきはにさした。

蘇うきはから浮羽ねへ抜ける道みちであらうかを守備しやびさ

*

湯沐ゆのう令な田た中なか臣おみ足たり麻呂まろを遣つかわ

阿蘇あそ外が輪山りんざんあたる関せきをまも守もつていたと思おもわゆる

倉歴くら道みちへ阿あ

とお命めいになった。

ある宮地みやちあたりかに駐ちゆうとんせよ

三千さんせんの兵へいを率ひきいて、荊荻野たらののへ阿蘇神社あそが

さしたのであらう、將軍多臣品治おほのおみほむぢに、

もつともその直後、大海人皇子おほーあまのみこは、思おもい直なお

万-109 平成元 3/23 朱印
 前門の虎 127 彦彦 10-109
 狼おきぬ 62 4,903-1/2 平成元 3/20 月 6

(高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人
 子軍にとつて好機となろう。
 大海人皇子は、いずれ時を見はからい
 大倭国(肥後国)の軍を北上させ、近江
 (大宰府)の弱手から襲わせるともりであら
 れたのかも知れない。
 川や、近江(大宰府)の軍勢の一部を、南
 へ向かわせ、さんざん手におらせ、
 充分と考えられたようにも想像さへる。
 前門の猛虎、および後門の狼(大神)
 に揺揺りかけられながらの戦いとなる。
 寸時といえども気が許せず、やかて堪え切
 れなくなつて、
 間に動揺が生じた時こそ、
 大海人皇子

$$\begin{array}{c} 10/12 \\ 17/12 \\ 10/11 \end{array}$$

万1-109^D 样本1層の部
同様由4.908^D 1/2 18行に

H9.5.3(土) H5.11.6(土) 血子 4908 300 150 4875 4900 300 2月2日
 紀下396 激突 089 井上298 本隊 2057 4904 250-1/2 237 250-1/2

大海人皇子軍と大友天皇軍の進撃開始

さて同日の七月二日 大海人皇子は、村

国連男依・書首根麻呂・和珥部臣君手・膽香

反臣安倍を遣わし、数万の兵を率いさせ、不

破(豊前の柳あたり)から出撃して直接近江

(大宰府)へ進入するようお命になった。

この時、近江方の軍と判別し難いことを案

いて、大海人皇子は、赤色を自軍の衣

の上につけさせた。

こうして、高市皇子の

近江(大宰府)を目指しての進撃を開始し

た。

全軍の統帥を委した高市皇子は、兵達

を励ましつつ、トリトリと近江(大宰府)へ

詰め寄ってゆかれたのであろう。

*

紀下397°

4973

二と

4973°165 4,905P

紀下406°

御史大夫 紀下375°天智10年 紀下583°御史大夫 山部王 紀下396° 8843P1059

つれて高市皇子の軍に投降した。

軍羽田公矢国・其の子大人らか、一族をひき

ついでこのような混乱の時、近江方の将

府へ引き返し、みずから頸を刺して死んだ。

また、蘇賀臣果安か、大上から大宰

府へ引き返し、みずから頸を刺して死んだ。

乱れによって軍を進めることが出来なかった。

賀臣果安・巨勢臣比等のために殺され、是の

あたりに注ぐ川かの濱に軍勢を結束させた。

大上川（不明。不破と目と鼻の先にある琵琶湖東岸の

上郡彦根町でなく、博多湾東岸の箱崎・香椎

等が、数万の兵を率い、不破を襲おうとして

の蘇賀臣果安・同ト御史大夫の大納言に相当

では、山部王・御史大夫（大納言に相当）

この日（七月二日）、近江（大宰府）の方

てみることにしよう。

それでは、大友天皇の軍の様子を見

⑦ 4806⁺-2/2

54頁のタイトル

① 3035^P 4933^P
 ↓ 「項」を記すのは「こ」。

4.906^P

③ 3036P

三屏 18°12'12"

#上下 9P

⑤ 4932

紙下 400 125g

紀下 400^p

そこで大海人皇子は、羽田公矢国を将軍とし、越の国の地形に相当する所、筑前国の北岸沿いに切り入らせになった。尚、大友天皇は追いつめられて七月二十三日に自殺されることになるが、その前日の七月二十二日条に、

「是の日、羽田公矢国・出雲臣狛合ひて共に三尾城を攻めて降し」とある。(紀)

羽田公矢国らは、滋賀県高島郡三尾に相当するところ、筑前国の御尾のように見えるへ海の中道の先端にある島(志賀島)あたりにあった城を攻め落したのであらうと考えてみた。(三尾については、第五十四章「継体天皇の出自について」において既に述べた。

つまり、將軍羽田公矢国は、筑前国の北岸に居て軍を進め、志賀島あたりの三尾城へ向かったのだらうと解したい。(第54図壬申の乱要図へ三尾城参照)

1のきー
金部を削る 1003P

地名辞734P
紀下398P 地名辞766P
井上下299P 自伝町王
宇治下238P 154

④ 4919P 紀下397P 本行下

4907P

是より先(あるいは、近江軍の混乱より)
先(さき)の意味であらうか、近江(大宰府)
方は精兵を放ち、玉倉部邑(不明)を急襲し
た。
とはいえ高市皇子は、出雲臣伯を遣してこ
れを撃退された。
なお玉倉部邑は、美濃国不破郡玉村(岩倉
山の麓の旧地名)とも、滋賀県坂田郡米原町
醒井の地ともいわれる。(「帝国地名辞典」
太田爲三郎、名著出版へ玉倉部へ等参照)
しかしなから、不破(長岑海峡)に近
所(博多湾の東方に位置するとこ
ろ)において、出雲臣伯は近江方の精兵を撃退し
たのであろう、と想像される。
ともあれ、高市皇子軍と大友天皇軍とは、
筑前国の北岸地域で激しくぶつかり合い、鎧
を削つたに相違ない。
日本書紀は、この地域での戦闘に

下588 (神人 伊勢309)
注21

AD-111

4980

4908^{P-1/2}

AD-109 ④4903^{P-1/2}末
①-110 (欠元)

水888
④4880
④4919P

↓
空を下げる

改行

は 諸 せ る 鼓 の 音 は 雷 の 聲 と 聞 く ま で 吹 き 響
人 の お ひ ゆ る ま で に 敵 見 た る 虎 が 吼 ゆ る と
冬 ご も り 春 さ り 来 小 ば 捧 げ た る 幡 の 靡
宮 不 破 山 越 え て 高 麗 劍 和 製 が 原 の 食
天 降 り 座 して 天 の 下 治 め 給 ひ
す 国 を 定 め た ま ふ と 鶏 が 鳴 く 吾 妻 の 国
九 州 東 側 の 豊 国 の こ と か の 御 軍 士 を
召 し 給 ひ て ち は や ぶ る 人 を 和 せ と 服 従
は ぬ 國 を 治 め と 皇 子 な ち 大 御 手 に 弓 取
大 御 身 に 太 刀 取 り 帶 ば し 大 御 手 に 弓 取
り 持 た し 御 軍 士 を あ と も ひ た ま ひ 齊
る 鼓 の 音 は 雷 の 聲 と 聞 く ま で 吹 き 響
せ る 小 角 の 音 も 敵 見 た る 虎 が 吼 ゆ る と
諸 人 の お ひ ゆ る ま で に 捧 げ た る 幡 の 靡
は 冬 ご も り 春 さ り 来 小 ば 捧 げ た る 幡 の 靡

つ いて 多 く を 語 ら な い 。
敵 軍 を 打 ち 破 り 、 宗 像 の 地 の 水 沼 君 の 軍 勢
を 切 り 伏 せ 、 こ う して 徐 々 に 近 江 (大 宰 府)
へ 迫 っ て い っ た の で あ ろ う と 推 察 さ れ る 。

F4/20
4/19

4,908^P-2/2

とこの
前頁16行 添ふ
月

字令下げる

*

岩波書店、五八八頁、補注二八一二一参照)

ある。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系、
水るか、いうまでもなく定かならないとで
と、いかうと知れな、たのではなかうか、
勢いかつき、敵を大いに惑わせた、
から、神風が吹いてきて、引き放つ矢に

へ伊邪国(宇佐国)の天照大神の宮の方角
一帯)で戦っていた時、
あるいは、丁度このあたり(玄海灘沿い

とある。

持てある火の風の共、靡くがごとく、
風かもし、引き放つ矢の繁けく、思ふまで、
齊の宮中、神風に、吹き惑はし、渡会の、
矢の繁けく、思ふまで、聞きの、